

# 図書館で SF が読みたい！

(2019/10/29)

# 目次

はじめに	…	3
1.評論編	…	4
2.小説・芸術作品編	…	10
3.雑誌編	…	27
4.専門書編	…	30
5.外伝「ファンタジー・ホラー」	…	35
6.広島大学図書館ではこれを読め！	…	41
おわりに	…	47
おまけ	…	50

## はじめに

現在の私の読書ジャンルの主流にして、ジャンル外からは幼稚だと言われジャンル内ではマウンティング合戦の様相を呈しており(?)、さらに文学賞とは(ほぼ)無縁で、不憫な、SFについて、(2019年10月末時点で)広島大学図書館に所蔵されている作品を中心にまとめてみたいと思います。

この紹介で挙げる作品はどれもSFだと自信を持って言えるのですが、もちろん「SF以外のジャンルには含まれない」というつもりはありません。中には作者が「この作品はSFではない」と言っている作品もありますが、それを除外すると私が目指す「できるだけ広島大学図書館に入っているSF作品を紹介する」ということができなくなるので、作者には忖度しない方向で行きたいと思います。結構範囲を広く取って紹介するので「ほんとにSF?」と思うものがあるかもしれませんが、「あなたのSF」と「わたしのSF」は違うということで一つよろしく願いします。それでも、私としてはこれを読んで一つでも知らなかった作品に興味を持ち、あなたの思うSFの範囲が少しでも広がったらそれ以上に嬉しいことはありません。

(太字の『～』は広島大学図書館に所蔵されている作品です)

## 1. 評論編

一番 SF 評論関係で読みやすいのは声優の池澤春菜が『S-F マガジン』上で連載した(今もしています)エッセイをまとめた『SFのSはステキのS』(タイトルはレイ・ブラッドベリの『S is for Space』のパロディで、日本語訳『スは宇宙のス』が西図書館に入っています)でしょうか。東千田図書館に入っています。他にも読みやすいものの代表例としては大森望の著作があげられますが、残念ながら豊崎由美と共著の『文学賞メッタ斬り!』以外は入っていません。ただし、彼は『文芸年鑑』の SF 部門の解説を 1989, 1990, 2000, 2001, 2007, 2008, 2017, 2018 年(1990 年版は未所蔵)に担当しているのでそれで雰囲気はつかめるかもしれません(文体は少し硬いですが)。他にもたまに雑誌『ダ・ヴィンチ』に原稿が載ったりします。ところで『文芸年鑑』には文学賞受賞作家の写真や文学界全般の動向、死没者一覧、雑誌掲載作一覧などが載っており、さらに『文学賞メッタ斬り!』は文学賞をもとに作品を批評した内容で、SF 関連の内容こそ 1 章(+0.5 章)分しかありませんが他の章も読書の参考になる内容ばかりなので、どちらも SF に限らず読書好きな方全てにおすすめしたい書籍です。

一方で本格的な評論についてですが、日本 SF に関係するものなかでは『日本 SF こてん古典』の著者である横田順彌による『近代日本奇想小説史』や当時の日本 SF の(研究者ではなく)作家・評者などの関係者による評論である『日本 SF 精神史』、『日本 SF 論争史』、『現代 SF のレトリック』などが、また海外 SF については優れた翻訳者であり膨大な量の海外 SF 雑誌のコレクターであった野田昌宏の『「科学小説」神髄』を筆頭に『フランス流 SF

入門』、『中国科学幻想文学館』や英米 SF 雑誌の歴史をたどる『パ  
ルプマガジンの饗宴』などが広島大学図書館に入っています。最  
近の日本 SF の事情としては、2007 年にデビューしわずか 2 年ほ  
どで早逝したにも関わらず作品が日本 SF 大賞を受賞し大きなセ  
ンセーションを巻き起こした伊藤計劃をめぐる『ポストヒューマ  
ニティーズ 伊藤計劃以後の SF』、すぐ下に出てくるニッポンコン  
2007 で行った講演とそれに応える小説を収録された『サイエン  
ス・イマジネーション 科学と SF の最前線、そして未来へ』、  
3.11(2011 年に起きた東日本大震災)に対する SF 作家の見解をま  
とめた『3・11 の未来』という書籍がありますし、タイムトラベ  
ル系に特化した『時間 SF の文法』という書籍も所蔵されていま  
す。日本 SF 作家クラブが編纂した『世界の SF がやって来た!! ニ  
ッポンコン・ファイル 2007』や『国際 SF シンポジウム全記録』  
もあります。SF の創作に関するものは『SF の書き方 「ゲンロ  
ン大森望 SF 創作講座」全記録』(大森望編)や『コンピュータが小  
説を書く日』(佐藤理史)、『短篇小説講義』(筒井康隆)などがあり  
ます。前 2 つは習作なども入っており創作する過程が楽しめるの  
ではないでしょうか。

よりテーマを広げて周辺分野との関りを論じたものは、『虚構世  
界はなぜ必要か』(古谷利裕)、『アニメ研究入門』(小山昌宏、須川亜  
紀子)、『「ポスト宮崎駿」論』(長山靖生)、『スターウォーズによる  
と世界は』(キャス・R・サンスティーン)、『「シン・ゴジラ」をど  
う観るか』、『あなたは今、この文章を読んでいる。』(佐々木敦)、  
『エンドレスエイトの驚愕 ハルヒ@人間原理を考える』(三浦  
俊彦)、『サイバーミステリ宣言!』(一田和樹ほか)、『未来のサウン  
ドが聞こえる』(マーク・ブレンド)、『ビデオゲームの美学』(松永

伸司)、『フランケンシュタインの精神史』(小野俊太郎)などもあります。

さらに、研究というか特撮・漫画・アニメ・ライトノベルなどに出てくる設定を考察した柳田理科雄の『空想科学読本シリーズ』はだれでも一回は読んだことがあるのではないのでしょうか。作品考察がテーマの書籍は他にも前田建設がマジンガーZの地下格納庫を受注し見積・設計する『前田建設ファンタジー営業部』、現役の医師がブラック・ジャックに出てくる症例を考察する『ブラック・ジャック・ザ・カルテ』、ハリー・ポッターの魔法の実現可能性を考察する『ハリー・ポッターの科学』(ロジャー・ハイフィールド)、過去の名作から環境問題を読み解く『名作の中の地球環境史』(石弘之)などがありますし、夏目漱石作品の中の科学の描写を考察する『漱石のサイエンス』(林浩一)、新書でも名画に描かれた人物の診断をする『モナ・リザは高脂血症だった』(篠田達明)、妖怪の体の構造を真面目に考察する『ろくろ首の首はなぜ伸びるのか』(武村政春)、源氏物語の描写から当時の気候を推定する『平安の気象予報士 紫式部』(石井和子)、UFOと現代文明の関りを解く『UFOとポストモダン』(木原善彦)など読んでみると面白いものが結構あります。

また、評論とはちょっと違いますがブックガイドも多少入っており、第1世代(小松左京など1960年代以前デビュー)～第3世代(新井素子など1970年代後半デビュー)の日本SF作家の作品を収録した架空の全集「日本SF全集」を作るとしたらという構想で書かれた『日本SF全集・総解説』やハヤカワ文庫SFの“全作品”をレビューした『ハヤカワ文庫SF 総解説 2000』、海外作品につ

いての『SFはこれを読め!』などがあります。さらに『日本幻想作家事典』という書籍が2009年に出ていますが、これは日本国内における明治以降～2006年までの幻想的な作品をちょっとでも書いている作家がほとんど掲載されていて本当に驚異的な事典です。この紹介で取り上げる2006年以前デビューの日本人作家のほとんどはこれに載っていると思います。SF系作品も多い70～90年代のアニメーションのノベライズ本をまとめた『アニメノベライズの世界』という書籍もあります。アニメ自体については『日本TVアニメーション大全』という大型本が作品を知るにはおすすめでしょうか。

作家の自伝や伝記だと『星新一 一〇〇一話をつくった人』(星新一)、『蘇る伊藤計劃 Project Itoh revives』(伊藤計劃ほか)、『栗本薫・中島梓』(堀江あき子編)、『SF魂』(小松左京)、『不良老人の文学論』など(筒井康隆)、『妻に捧げた1778話』(眉村卓)、『光瀬龍 SF作家の曳航』(光瀬龍)、『菊地秀行 総特集 魔界都市へようこそ!』(菊地秀行)、『高い城・文学エッセイ』(スタニスワフ・レム)、『私の少女マンガ講義』(萩尾望都)などがあります。後述の第1世代以前の日本SFの開祖とも言われる押川春浪の伝記『「天狗倶楽部」快傑伝』(横田順彌)もあります。さらに井上やすし・筒井康隆・大江健三郎による『ユートピア探し 物語探し』にもSFを述べた所がありますし、ファンタジー児童文学作家三人による対談集『三人寄れば、物語のことを』(上橋菜穂子・荻原規子・佐藤多佳子)もあります。

他にも特定のジャンルや作家を扱ったもの、映画やアニメ、漫画との関係を述べたもの、社会問題とからめたものなど数多くあるので自分の好きな分野に関係するものを各自探してみてください

い。SF 以外のジャンルを扱った解説書もちろんたくさんありますが、SF が好きなら『世界文学ワンダーランド』(牧眞司)や『実験する小説たち 物語るとは別の仕方』(木原善彦)も読んでみると面白いと思います。

また、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で毎年行っている「学校読書調査」の結果を見てもわかりますが、実はSF とは切っても切れない関係にあるライトノベルについての評論の『ライトノベル研究序説』『ライトノベル・スタディーズ』(一柳廣孝・久米依子)、『ライトノベルよ、どこへいく』(山中智省)、『ライトノベルから見た少女/少年小説史』(大橋崇行)と、それに加えて『「少女小説」ワンダーランド』(菅聡子)、『少女小説事典』(岩淵宏子)もあります。「学校読書調査」の結果については、広島大学図書館所蔵の資料では 1954(第 1 回)~1979 年については『学校読書調査 25 年』、1980~1993 年については『毎日新聞 縮刷版』、1994 年以降については雑誌『学校図書館』を見ればわかります。さらに『恋愛小説ふいんき語り』(麻野一哉・飯田和敏・米光一成)は SF をとはほぼ無関係な恋愛小説についての書籍ですが、各項の最後は"その小説をもとにゲームを作るとしたら"という話題でまとめている興味深いです。そちらが主題の『ベストセラー本ゲーム化会議』という本もありますが、広島大学図書館には入っていないので興味がある方は探してみてください。

ところで、書籍を探す際には、SF に限らず小説、評論を含め 2001 年~2016 年に出版された作品については『朝日書評大成』でレビューされているものもあるのでそれも参考にしてみると良



いでしょう。SF系の人では奥泉光、円城塔、川端裕人、瀬名秀明、東雅夫、山形浩生などがレビューしています。最新作についてはたいていの新聞に書評欄が毎週決まった曜日(例えば『朝日新聞』は土曜日)に掲載されているのでそれを確認するのも手です(もっとも"全て"が載っているわけではないですが)。

## 2.小説・芸術作品編

まずは国内作家の小説作品から。広島大学図書館にも小松左京から伊藤計劃以後の作家まで数は少ないながら面白い作品が揃っています。

最初に紹介するのは小松左京、筒井康隆、星新一の御三家です。

小松左京の著作で一番有名なものはなんといっても『日本沈没』でしょう。地殻変動によって突如日本列島が沈没するという話ですが、1973年に出版されSFとしては異例の大ベストセラーとなりました。中央図書館書庫に入っています。実は『日本沈没』には2006年に谷甲州との共著(原案：小松左京、執筆：谷甲州)で出された『日本沈没 第二部』が存在します。これは『日本沈没』の25年後のストーリーで、この二作品はどちらも「日本の未来」を考えさせられる名作だと思います。私の読書体験の何分の一かは確実に『日本沈没』『日本沈没 第二部』でできています。他にもたくさん名作があるのですが、残念ながら広島大学図書館にはあまり入っていません。単独で入っているのは『日本アパッチ族』『アメリカの壁』『怨霊の国』の三作のみです。あとはアンソロジーにぽつぽつ入っていて、「エスパイ」「哲学者の小径」「ゴルディアスの結び目」「沼」が『冒険の森へ 傑作小説大全』に、「お召し」が『不思議の扉 午後の教室』に入っています。どちらのアンソロジーも他のSF作品も入っていて中々読み応えのある内容です。さらに「地には平和を」「戦争はなかった」「ご先祖様万歳」「物体O」などが『小松左京セレクション1 日本』に入っていますがなぜか2巻以降は入っていません。『小松左京全集 完全版』(先ほどの『日本アパッチ族』は全集の第1巻です)も同様です。

とっても残念です。

筒井康隆、星新一の二人についてですが、筒井康隆に関して言えば1983年に出版された『筒井康隆全集』が第8巻を除き(なぜ8巻だけないのでしょうか?)全て入っており、それ以降に出版された作品も『虚航船団』『夢の木坂分岐点』『文学部唯野教授』『モナドの領域』など割と入っているほうだと思います。全集を引けば「時をかける少女」も「日本以外全部沈没」も「バブリング創世記」も「虚人たち」も読めます。しかし、残念なことに章が進むごとに使える音(ひらがな)が一つずつ減っていく怪作にして傑作『残像に口紅を』やメタ・ライトノベル『ピアンカ・オーバーステディ』は入っていません、と思ったら2018年に発表から29年を経て『残像に口紅を』が入りました(拍手!!)。ただ未だに、毎日の新聞連載と同時に投書や創世期のBBSで集まった読者の意見を内容にリアルタイム(といっても数日後)で反映させるという超実験的な手法を用いた第13回日本SF大賞受賞作の『朝のガスパール』は所蔵されていません。どうしても読みたければ『朝日新聞 縮刷版』を地道にあたって当時の連載を読みましょう。星新一は、なんとほとんど"全て"のショートショートを収録した『星新一ショートショート1001』が入っており、蔵書的には御三家の中で最も恵まれています。長編は3つありますが、その中の一つ『ブランコのむこうで』が(大活字本ですが)入っています。

他にも第1世代作家としては『消滅の光輪』(眉村卓)、『鏡の国のアリス』(広瀬正)、『太陽の世界』『妖星伝』(半村良)や『安部公房全集』(安部公房)、『北杜夫全集』(北杜夫)なども入っています。

ところで日本SFの一つの潮流をさかのぼると戦前の海洋冒険小説に行きつくそうです。そんな意味で言えば1900年代に活躍

した押川春浪や 1930 年代の海野十三らが日本 SF の開祖とい  
てよいと思います。彼らの作品の中では『押川春浪集 少年小説  
大系第 2 巻』(押川春浪)、『海野十三全集』(海野十三)に加え『空  
想科学小説集 少年小説大系第 8 巻』『少年 SF 傑作集 少年小説  
大系第 18 巻』(いずれも横田順彌編)が広島大学図書館に入ってい  
ます。また彼らと同時期に書かれた未来小説が長山靖生によって  
まとめられた『懐かしい未来』というアンソロジーもあります。  
他にも日本の第 1 世代以前の作品としては『銀河鉄道の夜』『グス  
コーブドリの伝記』などの宮沢賢治の諸作品や『家畜人ヤプー』  
(沼正三)が入っており、「押絵と旅する男」(江戸川乱歩)や「山月  
記」「文字禍」(中島敦)など SF 的な作品も全集などに収録されて  
います(前者は『江戸川乱歩名作選』に、後者はともに『山月記・  
李陵 他九篇』に収録)。他にも『野村胡堂 伝奇幻想小説集成』  
(野村胡堂)などもあります。個人的なおすすめは稲垣足穂の「一千  
一秒物語」や「星を売る店」「天体嗜好症」などの短篇です(これら  
は『稲垣足穂全集』で読めます)。この辺りは 5 章の最後の幻想文  
学のところを見て下さい。もっと遡ると『南総里見八犬伝』や『竹  
取物語』も SF として再定義できないことはないと思いますが、流  
石に当時 SF としては書かれていないでしょう。

時代は進んで 1970~90 年代には一気に「SF の浸透と拡散」  
(by 筒井康隆)が起こってバラエティ豊かな作風の作家が多く現れ、  
SF 作家以外の作家による SF 的な作品も現れ始めました。この時期  
の作品で入っているのは『あなたの魂に安らぎあれ』『魂の駆動体』  
『言壺』『膚の下』『ぼくらは都市を愛していた』などの『戦闘妖  
精 雪風シリーズ』『敵は海賊シリーズ』以外の作品(神林長平)、

『零號琴』(飛浩隆)、『ラピスラズリ』『飛ぶ孔雀』(山尾悠子)、『テレビジョン・シティ』『筆筒のなか』など(長野まゆみ)、『美しい星』(三島由紀夫)、『ドン松五郎の生活』『吉里吉里人』『言語小説集』など(井上ひさし)、『同時代ゲーム』『M/T と森のフシギの物語』『治療塔』など(大江健三郎)などです。

1990年代に入るとライトノベルが勃興しファンタジーブームとなり「SF 冬の時代」と呼ばれるほどSFが売れなくなります。現在現役のSF作家の中にもこの時期にデビューした人は数多くいますが、ほとんどはホラー、ファンタジー、ミステリやライトノベル出身です。また他ジャンルの作家によるSFの名を冠さないSF作品も多くみられるようになります。例えば『遠い海から来たCoo』(景山民夫)、『パラサイト・イヴ』(瀬名秀明)、『リング』『らせん』『ループ』(鈴木光司)、『硝子のハンマー』『クリムゾンの迷宮』『新世界より』(貴志祐介)、『失われた過去と未来の犯罪』『アリス殺し』(小林泰三)、『誰に見しょとて』(菅浩江)、『トワイライト・テールズ』(山本弘)、『アリスマ王の愛した魔物』(小川一水)、『かめくん』(北野勇作)、『蚤のサーカス』(藤田雅矢)、『アナキー・イン・ザ・JP』(中森明夫)、『ゾンビ日記』(押井守)、『すべてがFになる』『スカイ・クロラ』『風は青海を渡るのか?』『青白く輝く月を見たか?』『私たちは生きているのか?』『人間のように泣いたのか?』など(森博嗣)、『スキップ』『ターン』『リセット』(北村薫)、『龍は眠る』『蒲生邸事件』『ドリームバスター』『クロスファイア』『英雄の書』など(宮部みゆき)、『パラレルワールド・ラブストーリー』『パラドックス 13』『プラチナデータ』『時生』など(東野圭吾)、『六番目の小夜子』『ネクロポリス』『蒲公英草紙』『エンド・ゲーム』『夢違』など(恩田陸)、『魍魎の匣』『南極(人)』

など(京極夏彦)、『偽史日本伝』『日本語の乱れ』『疑史世界伝』『幕末裏返史』(清水義範)、『実験小説ぬ』(浅暮三文)などです。ちなみに森博嗣は作家になる前に研究者として『C 言語によるマトリックス演算』『C 言語による有限要素法入門』という教科書を黒川善幸という方と共著で書いています。内容は手加減なしの技術書ですが気になる方はどうぞ。

他にも、同時期以降は SF 的要素を扱った作品としては、エンターテイメント系では『カゲロボ』(木皿泉)、『ブレイクスルー・トライアル』(伊園旬)、『安政五年の大脱走』など(五十嵐貴久)、『十二単を着た悪魔』(内館牧子)、『シャーロック・ホームズ対伊藤博文』(松岡圭祐)、『東京帝大叡古教授』(門井慶喜)、『アキハバラ@DEEP』『ブルータワー』など(石田衣良)、『失はれる物語』など(乙一)、『凍りのくじら』(辻村深月)、『魔法使いは完全犯罪の夢を見るか?』(東川篤哉)、『心霊探偵八雲シリーズ』『天命探偵真田省吾シリーズ』(神永学)、『QED シリーズ』『毒草師シリーズ』(高田崇史)、『ダック・コール』(稲見一良)、『赤朽葉家の伝説』『製鉄天使』『伏 贖作・見八犬伝』など(桜庭一樹)、『おとぎのかげら 新釈西洋童話集』(千早茜)、『土漠の花』(月村了衛)、『水域』(椎名誠)、『百年法』(山田宗樹)、『七十歳死亡法案、可決』(垣谷美雨)、『島と人類』(足立陽)、『進化論』(芝田勝茂)、『東京島』『優しいおとな』(桐野夏生)、『仮想儀礼』など(篠田節子)、『夜市』『金色機械』など(恒川光太郎)、『独白するユニバーサル横メルカトル』『ヤギより上、猿より下』など(平山夢明)、『むかしのはなし』(三浦しをん)、『夜の国のクーパー』『火星に住むつもりかい?』『モダンタイムス』『フーガはユーガ』『シーソーモンスター』など(伊坂幸太郎)、『も

ののふの国』(天野純希)、『コイコワレ』(乾ルカ)、『壁抜け男の謎』『闇の喇叭』『真夜中の探偵』など(有栖川有栖)、『幻想建築術』(篠田真由美)、『カラマーゾフの妹』(高野史緒)、『フォルトウナの瞳』(百田尚樹)、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『1Q84』など(村上春樹)、『希望の国のエクソダス』『歌うクジラ』など(村上龍)、『パパと娘の七日間』『鉄道員』『椿山課長の七日間』(浅田次郎)、『ガダラの豚』(中島らも)、『人種改良研究所』(竹井敏)など、また純文学の方からは『プラトン学園』『鳥類学者のファンタジア』『神器 軍艦「榎原」殺人事件』など(奥泉光)、『あ・じゃ・ぱ・ん』など(矢作俊彦)、『ベルカ、吠えないのか?』『聖家族』(古川日出男)、『バースト・ゾーン 爆裂地区』など(吉村萬壺)、『邪悪なる小説集』(小林恭二)、『日本文学盛衰史』『ミヤザワケンジ・グレーテストヒッツ』『ゆっくりおやすみ樹の下で』など(高橋源一郎)、『自動起床装置』(辺見庸)、『サーチエンジン・システムクラッシュ』(宮沢章夫)、『人外』(松浦寿輝)、『R 帝国』など(中村文則)、『琥珀のまたたき』など(小川洋子)、『よもつひらさか往還』など(倉橋由美子)、『穴』『工場』『庭』(小山田浩子)、『百年泥』(石井遊佳)、『消滅世界』『地球星人』(村田沙耶香)、『タイムスリップ・コンビナート』『東京妖怪浮遊』『水晶内制度』『ひょうすべの国』(笹野頼子)、『犬身』(松浦理英子)、『くちなし』(彩瀬まる)、『蛇を踏む』『物語が、始まる』『神様』など(川上弘美)、『異類婚姻譚』(本谷有希子)、『献灯使』『地球にちりばめられて』(多和田葉子)など、他にも『妄想科学小説』(赤瀬川原平)、『小説君の名は。』『小説天気の子』(新海誠)、『約束のネバーランド』(七瀬/白井カイウ)、『マボロシの鳥』(太田光)、『想像ラジオ』(いとうせいこう)などたくさん出版されたものが所蔵されています。

さらに 21 世紀に入ると日本 SF 新人賞と小松左京賞により再び SF は再び勃興します。21 世紀デビューの作家の SF 作品では『死都日本』『震災列島』(石黒耀)、『首都感染』(高嶋哲夫)、『終戦のローレライ』『川の深さは』『亡国のイージス』(福井晴敏)、『幽霊人命救助隊』『ジェノサイド』(高野和明)、『リアル鬼ごっこ』『スイッチを押すとき』『93 番目のキミ』など(山田悠介)、『キャラクターズ』(東浩紀/桜坂洋)、『クオンタム・ファミリーズ』(東浩紀)、『失われた町』『鼓笛隊の襲来』(三崎亜記)、『空の中』『海の底』『図書館戦争』など(有川浩)、『華竜の宮』『破滅の王』(上田早夕里)、『ルナ』(三島浩司)、『ジャン=ジャックの自意識の場合』(樺山三英)、『四畳半神話体系』『有頂天家族』『有頂天家族 二代目の帰朝』『ペンギン・ハイウェイ』『宵山万華鏡』『夜行』『熱帯』など(森見登美彦)、『鴨川ホルモー』『鹿男あをによし』『プリンセス・トヨトミ』『偉大なる、しゅららぼん』『バベル九朔』『パーマネント神喜劇』など(万城目学)、『ナイチンゲールの沈黙』『モルフェウスの領域』『アクアマリンの神殿』など(海堂尊)、『完全なる首長竜の日』(乾緑郎)など、そして『ハーモニー』『虐殺器官』(伊藤計劃)、『屍者の帝国』(伊藤計劃・円城塔)が入っています。

SF 界にとって伊藤計劃の死去(2009 年)は大きな衝撃を与えたく、現在は「伊藤計劃以後」と呼ばれており、ここ 10 年の間にデビューした作家の中には彼の影響を受けた作家もいます。『これはペンです』『道化師の蝶』『バナナ剥きには最適の日々』『プロローグ』『エピローグ』『文字渦』など(円城塔)、『松本城、起つ』(六冬和生)、『さよならペンギン』(大西科学)、『君の話』(三秋縋)、『盤上の夜』『ヨハネスブルグの天使たち』『スペース金融道』



『カプールの園』『後は野となれ大和撫子』(宮内悠介)、『know』(野崎まど)、『凍土二人行黒スープ付き』『パラダイスイー8』(雪舟えま)、『未来職安』(柞刈湯葉)、『真夜中乙女戦争』(F)、そして異世界 SF ではなく言語 SF の『異世界語入門 転生したけど日本語が通じなかった』(Fafs F. Sashimi)などが入っています。円城塔は伊藤計劃と同時期デビューですがあえてこちらに入れてみました。

次章のテーマである雑誌にも通じるところがありますが、アンソロジーには単行本そのものが入ってなくても作品が読めるという利点があります。この紹介でも『冒険の森へ 傑作小説大全』『少年小説大系』や5章では『書物の王国』などを紹介していますが、他にも清水義範、豊田有恒、野坂昭如の作品が収録されている『日本原発小説集』、藤井太洋、伏見完、柴田勝家、吉上亮、仁木稔、王城夕紀、伴名練、長谷敏司ら新進気鋭の作家が参加している『伊藤計劃トリビュート』(『伊藤計劃トリビュート2』もあります)これは未所蔵)、洋邦のロボットに関係する SF とその解説が収録されている瀬名秀明編集の『ロボット・オペラ』、SF は松本侑子と大原まり子が、他に菅浩江、森奈津子、小谷真理などの作品が収録されている全篇女性作家による実質的に“フェミニズム”がテーマのアンソロジー『ハンサムウーマン』、「20」をテーマに20人の作家が作品を寄せた『20の短編小説』(SF系作品は円城塔、恩田陸、川上弘美、津村記久子、藤井太洋、宮内悠介、森見登美彦など)、上で挙げた小松左京に加えて古橋秀之、森見登美彦、有川浩、平山夢明らの作品が読める『不思議の扉 午後の教室』(大森望編)、「お風呂」に関するジャンル不問の短篇が集め

られた『小説乃湯 お風呂小説アンソロジー』(SF系では海野十三、筒井康隆、清水義範など)、マンガ『宇宙兄弟』を題材に、それに関係するテーマで書かれた小説やエッセイが収録されている『宇宙小説』、『源氏物語』を現在の作家が変奏した『ナイン・ストーリーズ・オブ・ゲンジ』、『虚無への供物』で有名な中井英夫へ捧げるオマージュ『凶鳥の黒影』、三崎亜記、笹野頼子、宮澤賢治などの作品が収録されている「図書館」をテーマにした『図書館情調 Library & Librarian』、雑誌「モンキービジネス」に掲載されたものがまとめられた『短篇集』(柴田元幸ほか)、栗本薫、川上弘美の作品やそれ以外にも松尾芭蕉の俳句なども収録されていて装丁もすごく凝っている『孢子文学名作選』なんていうアンソロジーもあります。『猫の文学館 I』『猫の文学館 II』『月の文学館』『星の文学館』(和田博文編)にも幻想的な作品が含まれていますし、『1964年の東京オリンピック』(石井正己編)にも星新一の短篇が含まれていました。また、全集『コレクション 戦争×文学』の第5巻『イメージーションの戦争 幻』にはSF・幻想文学系の作品が収録されています。SF作品で言えば「通いの軍隊」(筒井康隆)、「The indifference engine」(伊藤計劃)、「おれはミサイル」(秋山瑞人)や「リトルガールふたたび」(山本弘)などが見事。「戦争」というテーマはとっつきにくいかもしれませんがSF好きなら思想に関係なくこの巻だけでも一読の価値ありです。扉絵にある石田徹也の『飛べなくなった人』も必見。別巻『<戦争と文学>案内』には前述の大森望による日本SFと戦争・科学技術の関わりについての評論が収録されています。杉江松恋の評論も読むと興味深いでしょう。

さらに、ちょっと逸れますがいわゆる“実験小説”として、講談社

文芸文庫の『戦後短篇小説再発見』の中の一つ(第10巻)で安部公房、半村良、筒井康隆、高橋源一郎、笙野頼子らの作品が収められている『表現の冒険』(特に高橋源一郎の「連続テレビ小説ドラえもん」は必読…か?)や、世界初の TOEIC 小説『不思議の国のグプタ』(ヒロ前田／清涼院流水)や、文体に特徴のある『ab さんご』『感受体のおどり』(黒田夏子)、注釈が異常に多い『なんとなく、クリスタル』『33 年後のなんとなく、クリスタル』(田中康夫)、『雨月荘殺人事件』(和久峻三)も紹介しておきます。『ab さんご』は正直に言って芥川賞を受賞した表題作より後ろの初期作 3 つの方が読みやすいです。また『雨月荘殺人事件』は初"見"ではだれでも絶対目を疑うと思います。私はどう読めばいいかわかりませんでした。

日本作品の外国語訳については、この辺りはあまり詳しくないので網羅できませんが、日本の SF・ファンタジー系作品を英訳して出版している「Haikasoru」というレーベルの収録作の中では『Asura girl』(Otarō Maijo)、『Belka, why don't you bark?』(Hideo Furukawa)、『The navidad incident : the downfall of Matías Guili』(Natsuki Ikezawa)が入っています。それぞれの邦題は『阿修羅ガール』(舞城王太郎)、『ベルカ、吠えないのか?』(古川日出男)、『マシアス・ギリの失脚』(池澤夏樹)。どれも幻想的な作品です。他にも『親指 P の修業時代』(松浦理英子)の英訳である『The apprenticeship of Big Toe P』(Rieko Matsuura)もありました。

さて、国外作家についてです。実は海外 SF はあまり読んでないので書名を並べるだけになってしまいますが、最初期の名作と言

例えば『海底二万里』『八十日間世界一周』『地底旅行』『十五少年漂流記』(ジュール・ヴェルヌ)に『透明人間』『タイム・マシン 他九篇』『モロー博士の島 他九篇』『宇宙戦争』『解放された世界』『盗まれた細菌／初めての飛行機』(H・G・ウェルズ)でしょうか。それよりは少し前の『フランケンシュタイン』(メアリー・シェリー)や『ジークル博士とハイド氏』(スティーヴンソン)も読み逃しません。これら以前の作品といえば、こちらも聖書(『旧約聖書』『新約聖書』など)や『ギリシア神話』まで遡ろうと思えばできますが、『ケプラーの夢』(ヨハネス・ケプラー)(1634)や『日月両世界旅行記』(シラノ・ド・ベルジュラック)(1650-1660)、『ガリヴァー旅行記』(スウィフト)(1735)、『ほら吹き男爵の冒険』(ビュルガー)(1765)が本当に"最初期"の作品といえるでしょうか?(ヴェルヌやウェルズの登場の約 150-250 年前!)他にも「アンドロイド」が人造人間という意味で初めて使われたオーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダンの「未来のイヴ」(『ヴィリエ・ド・リラダン全集』に収録)(1886)、「ロボット」という言葉が初めて使われたカレル・チャペックの戯曲『R.U.R.』(1920)があります。

現代の作品では『夏への扉』『月は無慈悲な夜の女王』(ロバート・A・ハインライン)、『コンプリート・ロボット』(アイザック・アシモフ)、『幼年期の終わり』『楽園の泉』『3001 年終局への旅』『神の鉄槌』など(アーサー・C・クラーク)の御三家に、『祈りの海』『順列都市』(グレッグ・イーガン)、『ユービック』『流れよわが涙、と警官は言った』『高い城の男』『ヴァリス』(P・K・ディック)、『ニューロマンサー』(ウィリアム・ギブスン)、『ディファレンス・エンジン』(ウィリアム・ギブスン&ブルース・スターリング)、『華氏 451 度』『火星年代記』『スは宇宙のス』『黒いカーニバ

ル』(レイ・ブラッドベリ)、『あなたの人生の物語』(テッド・チャ  
ン)、『虎よ、虎よ!』『破壊された男』(アルフレッド・ベスター)、  
『星を継ぐもの』『内なる宇宙』(ジェイムズ・P・ホーガン)、『オ  
ールウェイズ・カミングホーム』(アーシュラ・K・ル=グイン)、  
『タイタンの妖女』『スローターハウス 5』『はい、チーズ』『プレ  
イヤー・ピアノ』『猫のゆりかご』(カート・ヴォネガット・ジュニ  
ア)、『たったひとつの冴えたやりかた』『愛はさだめ、さだめは死』  
など(ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア)、『海を失った男』『一  
角獣・多角獣』『輝く断片』など(シオドア・スタージョン)、『ソラ  
リス』『完全な真空』『虚数』など(スタニスワフ・レム)、『さあ、  
気持ちがいいになりなさい』(フレドリック・ブラウン)、『デス博士の  
島その他の物語』(ジーン・ウルフ)、『ダールグレン』(サミュエル・  
R・ディレイニー)、『たんぼぼ娘』(ロバート・F・ヤング)、『ドゥ  
ームズデイ・ブック』(コニー・ウィリス)、『エンダーのゲーム』  
(オースン・スコット・カード)、『時間封鎖』(ロバート・チャール  
ズ・ウィルソン)、『渚にて』(ネビル・シュート)、『奇跡なす者た  
ち』(ジャック・ヴァンス)、『エンベディング』(イアン・ワトソン)、  
『異星人の郷』(マイクル・フリン)、『アルジャーノンに花束を』  
(ダニエル・キイス)、『アンドロメダ病原体』『ジュラシック・パー  
ク』『ロスト・ワールド』『NEXT』(マイケル・クライントン)、『ダ  
ヴィンチ・コード』『天使と悪魔』『ロスト・シンボル』『パズル・  
パレス』『デセプション・ポイント』など(ダン・ブラウン)、『世界  
の終わりの天文台』(リリー・ブルックス=ダルトン)、『深海の Yrr』  
(フランク・シェッツィング)、『小型哺乳類館』(トマス・ピアース)、  
『青い脂』(ウラジーミル・ソローキン)、『動きの悪魔』(ステファ  
ン・グラビンスキ)、『蜜蜂』(マヤ・ルンデ)、『POWER』(ナオミ・

オルダーマン)などの名作のほか、『重力の虹』(トマス・ピンチョン)、『1984年』『動物農場』(ジョージ・オーウェル)、『すばらしい新世界』(オルダス・ハクスリー)、『山椒魚戦争』(カレル・チャペック)、『わたしを離さないで』『忘れられた巨人』(カズオ・イシグロ)、『ペンギンの島』(アナトール・フランス)、『数学的にありえない』(アダム・ファウアー)、『帰ってきたヒトラー』(ティムール・ヴェルメシュ)、『図書館大戦争』(ミハイル・エリザーロフ)なども入っているようです。他にも幻想的・実験的な作品として『星の王子さま』(サン＝テグジュペリ)、『冬の夜ひとりの旅人が』(イタロ・カルヴィーノ)、『十三の物語』(スティーヴン・ミルハウザー)、『リンカーンとさまよえる靈魂たち』(ジョージ・ソーンダーズ)もあります。(更に『変身』(フランツ・カフカ)や『フィネガンズ・ウェイク』(ジェイムズ・ジョイス)等に始まる世界文学の名作もSFの文脈で紹介したかったのですが、海外SFに輪をかけてほとんど読んでおらず現在勉強中のためこの項には入れません。興味がある方は前述の『世界文学ワンダーランド』(牧眞司)や『実験する小説たち 物語るとは別の仕方』(木原善彦)、他には『百年の誤読』(岡野宏文、豊崎由美)、『そんなに読んで、どうするの?』(豊崎由美)などの書評集を(ネタバレが嫌な方は目次だけ)読んでみて下さい。) ジュブナイル作品では『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』などで有名なマーク・トウェインによる、タイムトラベル+内政チート系の『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』、ハックルベリーがコレラ菌になってしまう『細菌ハックの冒険』や、『オズの魔法使い』(L.F.バウム)などもあります。同じ作者がSF・ファンタジーの両方を書いていることも多い(アレックス・シアラー、ロアルド・ダールなど)ので外伝のファン

タジーの所も読んでみて下さい。SF アンソロジーでは、名作と呼ばれる短篇ばかりを集めた『冷たい方程式』、数学がテーマの幻想的な作品が集まっている『第四次元の小説』、現代中国 SF のショーケースである『折りたたみ北京 現代中国 SF アンソロジー』などがありますし、『ヒョンナムオッパへ 韓国フェミニズム小説集』『古典 BL 小説集』『20 世紀ラテンアメリカ短篇選』などにも SF や幻想的作品が含まれています。国外作家による作品の原語版(または日本語版以外)については網羅的な紹介は勘弁して下さい。

最後に小説以外の芸術作品を紹介します。

実は日本で戦後真っ先に SF を手掛けたのは漫画家で、そのなかでも最初期の第一人者といえば手塚治虫です。広島大学図書館には『鉄腕アトム』と『火の鳥』が所蔵されています。他にも『少年漫画傑作集 少年小説大系別冊第 3,4 巻』で彼以外の幾人かの作品を読むことができますが、広島大学に入っている漫画作品の中で一番"科学"的なもの(ただし"SF"ではない)は『動物のお医者さん』(佐々木倫子)でしょうか(後書きには一部 SF 的なネタがあります)。この作品は(特に理系の)大学生なら絶対読むべき作品だと思います。

俳句や短歌では『念力家族』(笹公人)や、『現代短歌全集 第 17 巻』に収録の情報理工学者でもある坂井修一の歌集「ラビュリントスの日々」があります。『念力家族』はとぼけた味わいのユーモアあふれる作風で、「ラビュリントスの日々」は科学者ならではのモチーフによって SF 的な情感が得られる歌が収録されているどちらも珍しい作品です。詩では有名ですが谷川俊太郎や最果タヒの作品が面白いのではないのでしょうか。谷川俊太郎の作品は数多

く所蔵されていますが、ここでは処女作の『二十億光年の孤独』と『自選 谷川俊太郎詩集』だけ挙げておきます。最果タヒの作品は『死んでしまう系のぼくらに』『空が分裂する』『夜空はいつでも最高密度の青色だ』『愛の縫い目はここ』などが所蔵されていますし、所蔵されていない小説作品の中にも面白いものがあります(書き下ろし SF アンソロジー「NOVA シリーズ」にも寄稿しています)。

絵画については、最初に思い浮かぶのは M・C・エッシャーでしょうか。エッシャーについて、数理的背景が知りたい方は『エッシャー 変容の芸術』が、作品と人となりをどちらも知りたい方は『M.C.エッシャー その生涯と全作品集』がおすすめです。日本人作家では私は長岡秀星、安野光雅や石田徹也が思い浮かびます。安野光雅は数学者の森毅と親交があったらしく、数学の入門書の挿絵を描いていたりしますが、彼自身のことについては『別冊太陽 安野光雅の本』をおすすめします。石田徹也は 2005 年の急逝が惜しまれますが『石田徹也遺作集』『石田徹也全作品集』『石田徹也ノート』が入っています。

建築や演出も芸術ですが、その中でも日本で最も SF 的なものといえば 1970 年に開催された日本万国博覧会(いわゆる EXPO'70、大阪万博)です。テーマ館(太陽の塔)のサブ・プロデューサーは小松左京であり(チーフ・プロデューサーは岡本太郎)、他のパビリオンも未来に対する希望にあふれた最新技術を利用した生活を提示しており、演出に多くの SF 作家が関わっていました。実際に見ることはもう一部施設を除いて叶いませんが、当時の記録『日本万国博覧会 公式ガイド』『日本万国博覧会公式記録』『日本万国博覧会公式記録写真集』で雰囲気だけでも味わいましょう。



また 1985 年に開催された国際科学技術博覧会(科学万博、つくば'85)の記録『国際科学技術博覧会公式記録』も合わせて見ると面白いでしょう。残念ながら 2005 年日本国際博覧会(愛・地球博)の記録はありませんでした。

視聴覚資料についてですが、まずおすすめしたいのは「プロジェクト X～挑戦者たち～」です。SF ではないのですが、プロジェクト X 的な、つまり「なにか一つのことを達成する」というプロットは(SF には限らない)物語の王道でもあるため、見ても損はないでしょう。結構たくさん所蔵されていますが、中でもおすすめは『通勤ラッシュを退治せよ 世界初・自動改札機誕生』(自動改札)、『突破せよ最強特許網 新コピー機誕生』(国産複写機)、『日米逆転!コンビニを作った素人たち』(コンビニエンスストア)の 3 本と広島大学図書館には入っていないのですが『8 ミリの悪魔 VS 特命班～最強の害虫・野菜が危ない～』(ウリミバエ駆除)の計 4 本です。他にも NHK のノンフィクションとしては「プロフェッショナル 仕事の流儀」シリーズで『宮崎駿の仕事』と『漫画家 浦沢直樹の仕事』が、加えて『生命 40 億年はるかな旅』と後述の『フューチャー・イズ・ワイルド』の映像版(イギリスの TV 番組)があります。さらに映画については、邦画では『図書館戦争 Library wars』『天地明察』『東京島』(+『となりのトトロ』『借りぐらしのアリエッティ』)、洋画では『ブレードランナー』『Inception』『Batman forever』『アメイジング・スパイダーマン』『惑星ソラリス』が所蔵されています。また、前述の眉村卓の自伝的小説の映画化『僕と妻の 1778 の物語』や宮沢賢治の生涯を描いた『わが心の銀河鉄道』もあります。

音楽については、視覚イメージがないのでなかなか難しいです

が、ホルストの組曲「惑星」とそれを富田勲がシンセサイザーで演奏した作品が SF を感じさせます。特に後者はおすすめなのですが残念ながら広島大学図書館にはどちらもありません。富田勲については自伝『シンセサイザーと宇宙』が所蔵されているので興味を持った方は読んでみてください。歌謡曲についても一応書いておくと、広島大学の中央図書館地下書庫には「帰ってきたヨッパライ」(ザ・フォーク・クルセダーズ)、「およげ!たいやきくん」(子門真人)、「UFO」(ピンクレディー)などが収録されている CD 全集『昭和の歌』があります。他にも「宇宙戦艦ヤマト」(ささきいさお)、「時をかける少女」(原田知世)、「TATTOO」(中森明菜)、「さよなら人類」(たま)などの(詞が)SF 的な歌謡曲の歌詞を『日本流行歌史 下(1960-1994)』で見ることができます。

### 3.雑誌編

SF 小説に限らず雑誌に掲載されてから単行本になって出版される小説は珍しくなく、単行本が所蔵されていなくても掲載誌が所蔵されていれば読むことができます。

そこで掲載誌を探すのですが、残念ながら本命の『S-F マガジン』などの SF 専門誌は広島大学図書館には入っていません。しかし、SF 専門誌ではない一般の文芸誌・小説誌のなかにはいくつか入っているものがあり、それに載っている SF 作品を読むことができます。

代表的な雑誌は『小説すばる』です。例えば 2017 年 6 月号の特集は「宇宙と星空と小説と」で「惑星 X の憂鬱」(松崎有理)、「キリング・ベクトル」(宮澤伊織)、「彗星狩り」(西島伝法)などが掲載されています。その 2 ヶ月後の 2017 年 8 月号の特集は「ニューカマー2017 今期待される作家たち」で柞刈湯葉、柴田勝家、吉田エンなどの短編が読めます。また、2018 年 10 月号はずばり「SF 特集」です。小川哲や石川宗生の連載、草野原々や樋口恭介、西島伝法、高橋文樹の短編のほか、1 章で紹介した大森望の評論「新世代がつくる SF の現在」も載っています。『小説すばる』は 2017 年 1 月号から所蔵されていますが、さっき書いた号以外にも松崎有理、川端裕人、宮内悠介、井上夢人、三崎亜紀などの作品が載っています。現時点で書籍未収録の作品もいくつかあるので逆に貴重なものが読めるかもしれません。もっと前の号から所蔵されていれば『パワー・オフ』(井上夢人)や『ここはボツゴニアン』(宮部みゆき)、『雲の王』(川端裕人)などが読めただけに残念です。今後の掲載作に期待しましょう。ただ、古い巻は順次除籍されて

いるようなので気になる作品があれば早めに読みに行きましょう。

他にも『別冊文藝春秋』には松尾由美や瀬名秀明らの、『文學界』には円城塔や筒井康隆らの作品が掲載されています。さらに、『新潮』の2011年6月号には日中韓各国の文芸誌の合同企画「文學アジア 3×2×4」の一環として、「ゴッホとの一夜」(チョウ・ヒョン)と「ロードキル—Roadkill」(パク・ミンギユ)という韓国人作家によるSFが和訳されて掲載されています。その他の文芸誌『群像』『すばる』『文藝春秋』『オール讀物』『小説トリッパー(週刊朝日別冊)』などや新聞の連載などもこまめにチェックしていると不意に載っていたりします(私も追い切れてないですが)。1章で紹介した『文芸年鑑』にはどの小説誌に何が載ったかまとめてあるので、掲載作を探すときにはそれを参考にすると良いかもしれません。

ところでSF小説の特徴は科学・技術(Science, Technology, Arts)との親和性の高さからいわゆる通常の"小説誌"以外にも掲載されていることがある点です。文化・芸術系の雑誌で言えば、『ユリイカ』の2018年2月号の特集は後の項で取り上げる「クトゥルー神話の世界」で西島伝法、高山羽根子、赤野工作、藤田祥平、久正人らの創作が載っており、『現代詩手帖』の2015年5月号は「【特集】SF×詩」と銘打って最果タヒ、円城塔、西島伝法、飛浩隆らの詩が掲載されています。また『美術手帖』には2010年4月号～2014年8月号にかけて「<小説>」という企画で画家、写真家などのアーティストとコラボした小説が載っており、阿部和重、円城塔、最果タヒ、古川日出男などが書いています(後に『小説の家』というアンソロジーにまとまっています)。さらに『日経メディカル』には2007年2月号から2008年1月号まで『医学

のたまご』(海堂尊)が連載されていました。小説と全然関係なさそうな『**数学セミナー**』にも載ったことがあります。それは2009年4月号で、このときはQR-JAM(QRコードの発展形みたいなもの)の応用例として小林泰三が「探偵助手」という小説を寄稿しています。それに先駆けること約30年前の1974年、『**現代数学**』という雑誌にも石原藤夫による数学を絡めたSFショートショートが掲載されていました。1977年に『**別冊 現代数学**』で「数学とSFの世界」と題してまとめられています。

学会誌にも小説が掲載されていることがあり、例えば『**人工知能学会誌**』には2012年9月号から2016年11月号まで「**日本SF作家クラブ50周年記念プロジェクト×人工知能学会コラボレーション企画**」として松崎有理、眉村卓、新井素子、森岡浩之、宮内悠介、藤井大洋、田中啓文、機本伸司、大原まり子、小林泰三などが「人工知能」をテーマに短編を書いており、後に短編集にもなっています。が、雑誌自体は総合科学部の研究室にあり読みに行くのが大変かもしれません。

その他の注目作としては『**現代思想**』2019年8月号に「呑み込まれた物語—あるいは語られたブラックホールの歴史」(麦原遼+宮本道人)、『**小説トリッパー**』2018年春期号に「オブジェクトム」(高山羽根子)、『**文藝**』1988年文藝賞特別号に「少年アリス」(長野まゆみ)、『**科学画報**』1958年7号に「 $\alpha$ -ケンタウリ」(小隅黎)の他、漫画ですが『**美術手帖**』2019年10月号に「The Space Potter」(大竹竜平/寺本愛)も載っています。

まとめとして、総合的にみるとまずは西図書館の書庫へ『小説すばる』のバックナンバーを漁りにいくのがよいでしょう。

## 4. 専門書編

ここで言う「専門書」とは「SFを扱った専門書」ではなく(それは第1章で紹介)、「内容がSF的な専門書」のことで、その難易度は問わないことにします。クラークの三法則にもあるように「十分に発達した科学技術は、魔法と見分けがつかない」ので、魔法＝フィクションと捉えて最先端の科学技術書を紹介してもいいのですが、難解過ぎて自分でも分からないのでそれはやめることにして、最初に紹介するのはいわゆる**"トンデモ本"**です。

小説で疑似科学や陰謀論などをテーマにする場合は明確にフィクションだとわかるので何をやってもよいのですが、それをノンフィクションの体裁でやってしまう(もしくは本人がノンフィクションとして書いてしまう)と読者としては困ったことになってしまいます。このようなものはあまり所蔵されてないかと思っておりましたが検索すると結構入っていました。『**綺想科学論 世界の奇説・怪論・超研究**』『**フリーエネルギー「研究序説**』』『**素人がよく分かる相対性理論の大間違い**』『**水からの伝言**』『**神々の大いなる秘密 宇宙考古学が解き明かす異星人の足跡**』『**聖書と宇宙人**』『**ノストラダムス・ファクター**』『**謎の古代史 ユダヤと日本**』『**聖書に隠された日本・ユダヤ封印の古代史**』などなど…。他にも「超知ライブラリー」でOPACを蔵書検索すると『**漢字を発明したのは日本人だった!**』『**人類を創成した宇宙人**』『**超図解 竹内文書**』『**古代マヤ文明が日本を進化させた!**』『**宇宙人はなぜ人類に地球を与えたのか**』『**地球はやはりがらんだらうだった**』などなかなか香ばしい内容が目白押しです。

トンデモ論も小説にすると、例えば「陰謀論」は「歴史改変 SF」、

「古代文明」は「ワイドスクリーンバロック」、「宇宙人」は「ファーストコンタクト」、「終末論」は「ディストピア」、「予言」は「時間 SF」、「疑似科学」は「バイオ系」や「異世界系」、「超能力」は「サイキック系」、「超越者(神)の存在」は「高次元世界系」とこのような書籍を見かけるたびに「SFに(面白いかどうかは別に)してできるのにもったいないなあ」と思ってしまいますし、実際にそんな題材を扱った SF 作品も何作か読んだことがあります。ちなみに、未だ科学が未分化だった時代に当時は真面目に研究されていた『西洋占星術史』(中山茂)や錬金術の書籍(結構図書館にもあります)なども面白いです。

この分野(の研究?)で有名なのは『トンデモ本の世界』を書いた元"と学会"会長で SF 作家の山本弘です。他にも批判的立場から書かれたものとしては、ニセ科学一般についての『なぜ人はニセ科学を信じるのか』(マイクル・シャーマー)や『だまされやすさの研究』『なぜニセ科学に惹かれるのか』(マーティン・ガードナー)、日本で流行する偽史(架空の歴史)についての『偽史冒険世界』(長山靖生)や『近代日本の偽史言説』(小澤実)があります。

仕切り直して、まっとうな専門書にも Fiction の力を借りて書かれたものがあります。それらの中からいくつか紹介しようと思います。

最初は「生物系三大奇書」です。生物系三大奇書とは『鼻行類』(ハラルト・シュテュンプケ)、『平行植物』(レオ・レオニ)、『アフター・マン』(ドゥーガル・ディクソン)を指し、「奇書」というだけあってどれも尖った作品です。内容を簡単に紹介すると、「主に"鼻を使って移動する"ような哺乳類」についての架空の論文『鼻行類』、

「時空のあわいに棲み、われらの知覚を退ける植物群」についての解説書『平行植物』、そして『アフター・マン』は「未来の生物」についての図鑑です。『アフター・マン』の著者であるドゥーガル・ディクソンは恐竜が絶滅せずに進化したらどのような形態になっているかを予想した『新恐竜』や、イギリスのTV番組として制作された、現在の地球から(環境は変化せずに)人類だけが消滅した場合どのような生物の進化が起こるかを科学的に予想した『フューチャー・イズ・ワイルド』なども書いています。また『鼻行類』についてはその解題書というべき『シュテュンブケ氏の鼻行類』もあります。さらに、この系統としては幻の生物を写真と共に紹介する『秘密の動物誌』(ジョアン・フォンクベルタ、ペレ・フォルミゲーラ)や、架空の島の民俗について述べた『ランゲルハンス島航海記』(ノイロニムス・N.フリーゼル)という作品もあります。他にも、聖書中の神の選択をゲーム理論で解釈する『旧約聖書のゲーム理論』(スティーブン・J・ブラムス)、「ドーナツの穴」について様々な科学者たちが真剣に考察する『失われたドーナツの穴を求めて』(芝垣亮介、奥田太郎ほか)、来たるべき宇宙進出の際に必要な『宇宙倫理学入門 人工知能はスペース・コロニーの夢を見るか?』(稲葉振一郎)と『宇宙倫理学』(伊勢田哲治、神崎宣次、呉羽真)という作品もあります。

次は「小説形式の科学解説書」です。代表的なものは、物理学者であったジョージ・ガモフの著作です。彼は一般向けの書籍も多数書いていますが、その中でも『不思議宇宙のトムキンス』(ラッセル・スタナードと共著)『不思議の国のトムキンス』『原子の国のトムキンス』『生命の国のトムキンス』は物語仕立てで読みやすいと思います。これらを含め彼の著作は『ガモフ全集』で読むこと



ができます。他にも『宇宙への秘密の鍵』『宇宙に秘められた謎』(ルーシー&スティーヴン・ホーキング)、『サイエンス・クエスト』(アイリック・ニュート)や哲学の入門書である『ソフィーの世界』(ヨースタイン・ゴルデル)も入っています。日本人の著作では、講談社ブルーバックスで『マックスウェルの悪魔』や『不確定性原理』を書いた都筑卓司の作品(挙げた例以外にもたくさん入っています)や、科学ライターとして活躍する竹内薫の『ブレンワールドへの大冒険』、社会学の基礎をファンタジーと学生同士の対談として書いた『ダイバーシティ 生きる力を学ぶ物語』(山口一男)という作品も所蔵されています。また、科学書というより思想書ですが『コズモグラフィ』(バックミンスター・フラー)、『計算機と脳』(J.フォン・ノイマン)もあります。

最後に、私は数学が好きなので独断と偏見で「数学小説」をまとめて紹介します。「数学」には論理学・情報・コンピュータも含みます。先述したSF作品の中では、『第四次元の小説』、『順列都市』、『盤上の夜』に『アリスマ王が愛した魔物』(の表題作)がそうです。他にも円城塔なども数学・情報をモチーフにしたSFを書いています。最近の作品では『浜村渚の計算ノート』(青柳碧人)が有名になりました。もちろんSFでない「数学小説」もあります。例えば『博士の愛した数式』(小川洋子)や『天地明察』(沖方丁)、『容疑者 X の献身』(東野圭吾)がよく知られています。他にも和算をテーマにした歴史小説があったり、児童書・ヤングアダルト向け作品の中にも結構あったりします(後者では向井湘吾が有名)。上に雑誌編で挙げた『数学セミナー』『現代数学』に掲載された短篇もそうです。

そんな「数学小説」ですが、専門書に分類されるものとしては、例えば『フラットランド たくさんの次元のものがたり』(エドウィン・アボット・アボット)、『ピュタゴラスの復讐』(アルトゥーロ・サンガッリ)、『四次元の冒険』(ルディ・ラッカー)や「ビックリ」がくせになる『数の悪魔』(エンツェンスベルガー)、読むだけで論理的思考が身につく数学自己啓発小説らしい『論理ガール』(深沢真太郎)、それにサイモン・シンのあの著作よりは大分易しい『[小説]フェルマーの最終定理』(日沖桜皮)などがありますが、白眉は『数学ガールシリーズ』(結城浩)と川添愛の諸作品(『白と黒のとびら』『精霊の箱』『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット』『自動人形の城』『数の女王』)です。流石に『数学ガール』を SF と言ってしまうのは無理矢理感が出ますが、川添愛の一連の著作は SF といってもよいでしょう。

数学"小説"ではないのですが『ライフゲームの宇宙』(ウィリアム・パウンドストーン)もおすすめです。内容はセルオートマトンの入門書で、80年代以降コンピュータが発達すると同時に SF の題材として良く選ばれるようになっていく(ここに上げた中では『順列都市』など、井上夢人や小川一水も取り上げています)ので読んでみるとそれらの理解が深まるかもしれません。ライフゲームには表れるパターンに「グライダー」や「宇宙船」など名前がついていたりしますが、その「ただのビット列に名前を付け物語性を見出す」所は、まさに SF と言えます。

## 5.外伝「ファンタジー・ホラー」

ファンタジーやホラーもこれだけで紹介が一本書けるほどなのですが、ここではまとめて簡単に紹介したいと思います。

まずは海外のファンタジー作品から。『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』『スナーク狩り』『シルヴィーとブルーノ』(レイス・キャロル)から『指輪物語』(J・R・R・トールキン)、『ナルニア国物語』(C・S・ルイス)、『ゲド戦記』(アーシュラ・K・ル=グイン)、『ライラの冒険 黄金の羅針盤』(フィリップ・プルマン)、さらには(歴史からすれば)最近の『ハリーポッターシリーズ』(J・K・ローリング)、『ユゴーの不思議な発明』(ブライアン・セルズニック)や『図書館島』(ソフィア・サマター)まで有名作は広島大学図書館にも揃っています。他にも『ジム・ボタンシリーズ』『モモ』『はてしない物語』などが有名なミヒヤエル・エンデは『エンデ全集』が入っていますし、『チョコレート工場の秘密』や『オズワルド叔父さん』(ロアルド・ダール)、『ダレン・シャン』(ダレン・シャン)(作者名と作品名が同じ)、『チョコレート・アンダー・グラウンド』『スノードーム』『青空のむこう』(アレックス・シアラー)、『床下の小人たち』(メアリー・ノートン)、『リンの谷のローワンシリーズ』(エミリー・ロッド)などもおすすめです。

SF との関わりといえば、『ゲド戦記』の作者は SF 作家でもあるル=グインですし、前述の『モモ』『はてしない物語』や『チョコレート・アンダー・グラウンド』『スノードーム』、『チョコレート工場の秘密』は SF としても読むことができます。ル=グインの名作 SF である『闇の左手』は英語版『The left hand of darkness』が入っているので英語力に自身がある方は是非。『不思議の国のア

リス』や『チョコレート工場の秘密』もあとがきや解説を読むと日本語訳に大変苦勞されているようなので、原著『Alice in wonderland』『Through the looking-glass』『Charlie and the chocolate factory』で読んでみると良いと思います(私は無理でしたが)。そういえば『不思議の国のアリス』の作者であるルイス・キャロル(本名はチャールズ・ラトウィッジ・ドジソン)は数学・論理学者でした。数学小説とまでは行きませんが彼の作品にはそれらの影響が明らかに見られます。あと他に入れられそうな所がないのでここに入れてしまいますが『政治的にもっと正しいおとぎ話』(ジェームズ・フィン・ガーナー)もあります(『政治的に正しいおとぎ話』はありませんでした)。また『完訳 世界文学にみる架空地名大事典』というファンタジーに出てくる架空の地名を集めた事典もあります。

続いて日本作家による作品です。

日本人作家による作品で個人的に注目したいのは児童文学・ジュブナイル系のもので、『赤いろうそくと人魚』(小川未明)(絵本であります)、『誰も知らない小さな国』(佐藤さとる)、『扉のむこうの物語』(岡田淳)、『午前0時の忘れもの』(赤川次郎)、『魔法の宅急便シリーズ(その1~3)』(角野栄子)、『空色勾玉』『薄紅天女』『白鳥異伝』に『RDGシリーズ(全6巻)』(荻原規子)、『守り人シリーズ』『獣の奏者』『鹿の王』『鹿の王 水底の橋』(上橋菜穂子)、『ごきげんな裏階段』(佐藤多佳子)、『ラン』『カラフル』など(森絵都)、『西の魔法が死んだ』『沼地のある森を抜けて』『からくりからくさ』『りかさん』『裏庭』『家守綺譚』など(梨木香歩)、『十二国記シリーズ』『屍鬼』『ゴーストハント』(小野不由美)、『神様の御

用人』(浅葉なつ)、『ミミズクと夜の王』(紅玉いづき)などがあります。『21世紀のくものがたり』(岩波書店編集部)というミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』を受けて開催された童話創作コンクールの優秀作品がまとめられた書籍もあります。『十二国記シリーズ』は最初が異世界に転移するところから始まりますし、『沼地のある森を抜けて』はSFっぽい作品です。ちなみに『ミミズクと夜の王』はいまのところ唯一の広島大学図書館所蔵の電撃文庫作品です。

もう一つ注目したいのは「日本ファンタジーノベル大賞」と「メフィスト賞」という二つの文学(新人)賞の存在で、これらによっていわゆる西洋風の剣と魔法のファンタジー"ではない"国産ファンタジーのユニークな作品が数多く生まれました。

日本ファンタジーノベル大賞からは、前述の鈴木光司、北野勇作、藤田雅矢、森見登美彦や、候補に恩田陸、小野不由美、さらには『陋巷に在り』(酒見賢一)(第1巻のみ)、『バルタザールの遍歴』など(佐藤亜紀)、『テンペスト』(池上永一)、『遊仙譜』(南條竹則)、『かがやく月の宮』(宇月原晴明)、『じゃばけシリーズ』(畠中恵)、『ボーナス・トラック』(越谷オサム)など出身作家の作品も入っています。同様にメフィスト賞ですが、この賞はミステリ色が強いものの「一作家一ジャンル」といわれるほどで、多様な作品がこの賞から生まれています。前述した中では、森博嗣、石黒耀、高田崇史、浅暮三文、辻村深月の作品や、それ以外にも『デン德拉』(佐藤友哉)、『図書館の魔女』(高田大介)や『無貌伝』(望月守宮)が入っています。SF・ファンタジー系の作品は広島大学図書館には入っていないですが清涼院流水、浦賀和宏、新堂冬樹、舞城王太郎、西尾維新などもこの賞からデビューしています。

さらにこれらの賞とは関係ないものの、2012年に松本清張賞を受賞してデビューした阿部智里は『鳥に単は似合わない』『鳥は主を選ばない』『黄金(きん)の鳥』『空棺の鳥』『玉依姫』を書いており最近注目されていますし、大人向けの恋愛小説として人気を博した『いま、会いにゆきます』『吸涙鬼』(市川拓司)、『世界から猫が消えたなら』(川村元気)や『世界からボクが消えたなら』(涌井学／川村元気)などにも超自然的な要素があります。

また、ホラーといえば、前述の『フランケンシュタイン』や『ジーキル博士とハイド氏』も最初はホラー(怪奇小説)として書かれていますし、最近ではスティーヴン・キング(『図書館警察』『ランゴリアーズ』『悪霊の島』など)がモダンホラーの名手として有名です。さらに新本格ミステリの巨匠である綾辻行人が『Another』を書いて話題になりました。日本では前述したように90年代にファンタジーブームの中で「SF冬の時代」が来た時、『リング』の鈴木光司や『パラサイト・イヴ』の瀬名秀明、他にも小林泰三、貴志祐介(後者三人は日本ホラー小説大賞受賞)などがホラーからデビューしていますが、日本ホラー小説大賞(候補含む)からは他にも『岡山女』『邪悪な花鳥風月』『夜啼きの森』などを書いた岩井志麻子、『背の眼』『向日葵の咲かない夏』『骸の爪』などを書いた道尾秀吉などがデビューしています。ホラーは日本古来の民話、妖怪や怪談とも相性が良く、『ホラー・ジャパネスクの現在』『幻想文学、近代の魔界へ』『妖怪は繁殖する』や『妖怪・憑依・擬人化の文化史』『怪談文芸ハンドブック』などの評論・ブックガイドや、柳田國男の『遠野物語』に、それを京極夏彦が再構成した『遠野物語 remix』、文豪たちの怪奇ショートショートを集めた『文豪ての

ひら怪談』、さらに水木しげるの『妖怪画談』『幽霊画談』や『妖精画談』、インタビューなどを収録した『水木しげるのカランコロ』も読んだら面白いでしょう。妖怪といえば広島県の三次市には「稲生物怪録」が伝わっていますが、関連書籍としては『稲生物怪録絵巻』『稲生物怪録絵巻集成』や『稲生モノノケ大全』（稲生物怪録をテーマとした小説集）が入っています。更に遡って『雨月物語』、『日本靈異記』や『聊齋志異』、『剪燈新話』、『仙境異聞』などの東洋の古典怪奇譚にも興味が出てきます。西洋の作品では『独逸怪奇小説集成』『芥川龍之介選英米怪異・幻想譚』『英国怪談珠玉集』というアンソロジーもあります。現代の怪談と言えば“都市伝説”ですが、日本のものは『日本現代怪異事典』（朝里樹）、海外のものは『消えるヒッチハイカー』『チョーキング・ドーベルマン』『くそっ!なんてこった』（ジャン・ハロルド・ブルンヴァン）などがあります。

SF と関わりのあるホラーとしてはクトゥルー神話も外せません。原典は広島大学図書館では『遊星からの物体 X』と『古きものたちの墓』でその一部が読めるでしょう。『クトゥルー神話全書』、『H・P・ラヴクラフト大事典』という書籍や、H・P・ラヴクラフトによる『文学における超自然の恐怖』もあります。後世になり、日本でもブームが来て、菊池秀行は世紀の怪作『妖神グルメ』や『邪神金融道』などをクトゥルー神話の舞台を借りて書いているほか、SF 作家でも田中啓文、小林泰三や牧野修は好んで設定を使っています。余談ですがクトゥルー神話の邪神の名前である「Cthulhu」は人類には発音できないと言われており、「クトゥルー」、「クトゥルフ」、「ク・リトル・リトル」などの幾つかの“近似的”な読み方が混在しており検索しにくいですがなんとかしてみ

て下さい。

最後に、これらファンタジーやホラーの系統からは幻想文学へとつながります。日本人作家では泉鏡花、江戸川乱歩、稲垣足穂や澁澤龍彦などが書いており、ミステリの文脈で語られることが多い“三大奇書”(『ドグラ・マグラ』(夢野久作)(『夢野久作全集』に収録)、『黒死館殺人事件』(小栗虫太郎)(『大衆文学大系』(第25巻)に収録)、『虚無への供物』(中井英夫)の3つ。それらに強い影響を受けた『匣の中の失楽』(竹本健治)も含めて四大奇書という事もある)もこの系統に入ります。広島大学の図書館では『世界幻想文学大系』が何巻か抜けてはいますが入っていますし、手っ取り早く触れることができるのは東雅夫編纂の『書物の王国(全20巻)』でしょうか。他にも『幻島はるかなり』(紀田順一郎)、『ファンタジー・ブックガイド』、『幻想文学1500ブックガイド』、『世界幻想作家事典』、『日本幻想文学事典』というブックガイドや事典も参考になるでしょう。この辺りの事典は、前述の『日本幻想作家事典』もそうですが中々買える値段ではないので図書館に入っているのはとても有難いことです。ちなみにこの段落で挙げているほとんどの書籍を出しているのは国書刊行会で、やはりこの分野には強く、一読者からすれば国書刊行会さまさまといった感じです。



## 6.広島大学図書館ではこれを読み！

ここで取り上げた作品はどれもおすすめですが特におすすめの8作品を紹介します。

### 『華竜の宮』(上田早夕里,早川書房,2010)

所蔵場所：西図書館開架 913.6/U-32

いわゆる狭義のハード SF(科学的要素を深く考察した作品)かつ 21 世紀に出た日本 SF(簡単に言えば"いわゆる SF"な作品)で広島大学図書館に入っているものの中では一番おすすめです。地球規模の地殻変動というテーマでは過去に小松左京が『日本沈没』という超名作を書いています。うまく現代にアップデートされており、「魚舟」など独特



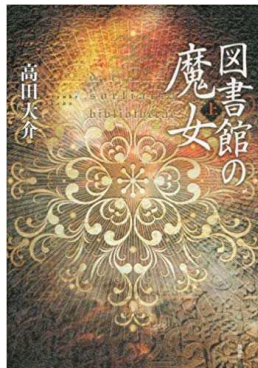
な生物との関わりも興味深かったです。主題の地球環境と生物進化の他にも、AI や遺伝子改変、サイバー空間、社会制度、民俗学などどこを中心にとってもそれだけで一つ小説が書けるほど内容が詰まっています。著者によるとまだまだ書いていない内容があるようなので今後が楽しみなシリーズです。(現在は短編いくつかと長編の続編 1 冊が刊行。)

### 『図書館の魔女』(高田大介,講談社,2013)

所蔵場所：西図書館開架 913.6/Ta-28/上,下

題名には「魔女」とありますが操るのは魔法ではなく言葉であり、ファンタジーというより架空世界の歴史小説でしょう。全て

のことが作中で関連しあっており、出てくる事柄も文献・書誌学、言語学、政治学、歴史学、地理学、工学、物理学、農学、医学、…と多岐にわたります。描写が主人公の内面外面に関わらず緻密で、そのためかなり長い作品となっていますがそのことは全く欠点になっていません。SF(特に理屈っぽいハード SF)が好きなら間違いなくハマる作品だと思います。流石「メフィスト賞」だという素晴らしい作品です。



### 『鼓笛隊の襲来』(三崎亜記,光文社,2008)

所蔵場所：西図書館開架 913.6/Mi-51

いわゆる(SF ではない)一般小説からも一つ紹介します。といっても、この作家はスリップストリーム系(伴流文学・変流文学・境界解体文学 by Wikipedia)の作品を多く書いていて、これもその例にもれない作品です。

表題作は赤道上に発生した戦後最大規模の"鼓笛隊"が列島を襲う話。あの日常から非日常に変わるときの高揚感と恐れが見事に書かれています。他にも「覆面社員」「突起型選択装置(ボタン)」「遠距離・恋愛」など面白いアイデアの作品が多く収録されています。SFはこの時すでに読んでいたものの(小松左京とか星新一とか)、最初に彼の作品(たしか『刻まれない明日』でした)を読んだ時はとにかく訳が分



からなくて謎の震えが走った思い出があります。今になって思えば、それはまさに"センス・オブ・ワンダー"だったのでしょう。あの時もっと他の作品も読んでおけばよかったと後悔しています。

## 『折りたたみ北京 現代中国 SF アンソロジー』

(ケン・リュウ(選),早川書房,2018)

所蔵場所：西図書館開架 923.78/R-98

この作品は現代中国 SF のアンソロジーで、英訳されたものがさらに和訳されて収録されています。日本人作家の日本語で刊行された作品は当然ながら最新作を読むことができますが、外国作品を日本語で読もうとすれば翻訳によってある程度タイムラグがあり、さらに非英語圏の作品となればそもそも翻訳の機会がないこともあるようです。そんな中で刊行されたこの本によって、(日本国内では)貴重な現代中国 SF の一端を知ることができたと思います。



収録されている作品の中で特に気に入ったものは劉慈欣の「円」です。作中に出てくる手旗信号によって計算させる描写は実際に見てみたい(というか実験してみたい)と感じました。「円」は日本語には未訳の長編『三体』の一部分らしいので是非本編を読みたいと思っています。と思っていたら、ついに劉慈欣の『三体』本篇が和訳されるようです。英訳を読もうか迷っていただけにとっても楽しみ！中国 SF の今後には注目です。

## 『虚数』(スタニスワフ・レム,国書刊行会,1998)

所蔵場所：中央図書館 989.83/L-54

SF とはやはり発想だと思わされる作品です。この書籍に収録されているのは小説ではなく架空の書物の序文や講義録で、その内容もバクテリアを利用した未来予知の研究書や人間の手に寄らない新しい文学「ビット文学」の研究書などの序文、未来の「完全な」百科事典のパンフレット、人智を超えたコ



ンピュータによる人間への講義録などで、まさに「人智を超える作品」です。どんなに難しくても、とにかく奇妙なものが読みたい方におすすめ。ちなみにこの作品によって小説以外の芸術作品や評論などもこの紹介に入れようと思いつきました。

## 『精霊の箱』(川添愛,東京大学出版会,2016)

所蔵場所：東図書館開架 007.1/Ka-98/上,下

前作『白と黒のとびら』の続きの話となります。結城浩の『数学ガールシリーズ』と並ぶ数学小説の双峰の一つですが、『数学ガール』は登場人物に数学を語らせる青春小説であるのに対し、『精霊の箱』は世界の構造にオートマトンを置いたファンタジーとなっています。『数学ガール』はどちらかといえば"教科書"的であるのでこちらのほうがより"小説"っぽいといえるかもしれません。そのためこちらをSF読みにはおすすめします。

しかし、ファンタジーでオートマトンやチューリングマシンを

取り上げて、さらにコンピュータの構造やRSA暗号まで話が進むとは思ってもおらずビックリしました。この後にでた『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット』と『自動人形の城』は数学からすこし離れ言語学的な内容になっています。最近では会話するロボットやスマートスピーカーが話題になっていますが、これらに興味のあるならこちらもおすすめです。



### 『SFのSはステキのS』(池澤春菜,早川書房,2016)

所蔵場所：東千田図書館 914.6/I-35

声優の池澤春菜が『S-Fマガジン』上で連載した(今もしています)エッセイをまとめた書籍です。池澤春菜はSF作家や評論家ではない(つまりSFの"専門家"ではない)ため一愛好者からの視点で書かれており、SFを取り扱った書籍としては破格の読みやすさです。日本SF大会の参加レポート、自身の読書遍歴、旅行記や父(池澤春菜の父は作家の池澤夏樹)とのエピソードなど楽しく読めると思います。ただし、中々のオタクであるため内輪ネタが多めになっています。ツッコミの多い注釈や左端の四コマ漫画(『今日の早川さん』のcoco作)も読みどころです。





## おわりに

図書館はいっぱい本があって、しかも無料で借りることが出来て、とっても楽しい所です。でもたくさんありすぎて、どれから読もうか迷ってしまうこともあるのではないのでしょうか。

そこで、私が普段よく読んでいる SF というテーマについて、広島大学図書館に所蔵されている書籍や作品を取り上げながらエッセイ風味にまとめてみました。さらに、どうせなら小説だけではなく評論なども読んで自分の好きな分野について深く知りたいと私は思うので、小説以外のものや周辺ジャンルの作品も取り上げてみました(大学図書館はエンターテイメント的な利用を想定しているのかという議論はさておき)。たぶん広島大学図書館に所蔵されている SF 系小説のうち 90%は紹介できたと思います。

他にも取り上げなかった作品としては、時にはフィクションかと思ふようなエピソードが出てくることがある科学者の伝記(例えばラマヌジャンやジョン・フォン・ノイマンなど)や、一般の科学解説書(早川書房の『数理を愉しむシリーズ』やサイモン・シンの著作(『フェルマーの最終定理』『暗号解説』『ビッグバン宇宙論』など)、それに『先生、巨大コウモリが廊下を飛んでいます!』などの『鳥取環境大学の森の人間動物行動学シリーズ』(小林朋道)、『有機化学美術館へようこそ』(佐藤健太郎)、『不思議の国のエリコ』(楠田枝里子)も面白い)、未来予測を扱った社会書(例えば『サピエンス全史』『ホモ・デウス』(ユヴァル・ノア・ハラリ)や、日本では『平成 30 年』(堺屋太一)(なぜか上巻だけ入っている))、架空戦記(『中ソ未来戦』(十河龍雄)がありました)などがあります。が自重しました。(取り上げられるほど読んでないとも言います。)

今回は SF というテーマでまとめましたが、テーマが変わればもちろん切り口が変わり、取り上げる書籍も変わります。私は他のテーマについてはあまり詳しくないのでまとめられませんが、別のテーマでまとめられたものも読んでみたいです。「ファンタジー」「ホラー」「ミステリ」とか「ライトノベル」とか「BL・GL」とか…。そういえば日本の近代からの有名作品を「望まれない妊娠」という観点でまとめた斎藤美奈子の「**妊娠小説**」という評論もありますね。こんなものが読みたいので、だれかまとめてください。よろしくお願いします。

この紹介を書くにあたって私もいろいろ読んでみましたが、まだまだ新たな発見があります。もし貴方が「これが SF だ」と思う作品が広島大学図書館に入っているにも関わらずこの紹介に入らなかったら、それは私とその作品を「SF でない」と思ったからではなく、ただ単に私が「見逃している」だけです。その時は私の無知を笑って流してください。よろしくおねがいします。(できれば教えてもらえるとすごく助かります。)

最後に、この紹介を書くきっかけとなった『日本 SF 全集・総解説』の日下三蔵、書評スタイルと内容に影響を受けた大森望とスタニスワフ・レム、そして私が読んでない作品をフォローしてくれた友人たちと Bookmeter と Amazon にレビューを書いた名も知れぬ方々に篤くお礼を申し上げます。





## おまけ

読書サークル「ホンノキモチ」による私設文庫が生物生産学部ロビーと学生プラザ 1F にあります。その文庫に入っている SF・ファンタジー要素がある作品をリストにしました。調査時点(2018/11/28)で借りられている作品があったらもしかしたらリストに欠けができるかもしれません。現在は活動してない？ようなのでいつ撤去されるかわかりませんが、気になった作品があれば早めに読んでみて下さい。私のおすすめは『あたしの中の……新装版』『シャングリ・ラ』『アド・バード』『となり町戦争』です。

書名	著者名	所在地
幽霊物語 上	赤川次郎	生物生産学部ロビー
天使と悪魔	赤川次郎	生物生産学部ロビー
怪奇博物館	赤川次郎	生物生産学部ロビー
天使よ盗むなかれ	赤川次郎	生物生産学部ロビー
天使は神にあらざ	赤川次郎	生物生産学部ロビー
天使に似た人	赤川次郎	生物生産学部ロビー
地下鉄に乗って	浅田次郎	生物生産学部ロビー
あたしの中の…… 新装版	新井素子	生物生産学部ロビー
シャングリ・ラ 上	池上永一	生物生産学部ロビー
シャングリ・ラ 下	池上永一	生物生産学部ロビー
ラッシュライフ	伊坂幸太郎	生物生産学部ロビー
グラスホッパー	伊坂幸太郎	生物生産学部ロビー
ゴールデン・スランバー	伊坂幸太郎	生物生産学部ロビー
マリアビートル	伊坂幸太郎	生物生産学部ロビー
完全なる首長竜の目	乾緑郎	生物生産学部ロビー
大婁だァ	遠藤周作	生物生産学部ロビー
リンウッド・テラスの心霊フィルム	大槻ケンヂ	生物生産学部ロビー
くるぐる使い	大槻ケンヂ	生物生産学部ロビー
黄昏の岸 暁の天 上	小野不由美	生物生産学部ロビー
君が見つける物語	角川文庫編集部	生物生産学部ロビー
猿の証言	北川少実	生物生産学部ロビー

脳髄工場	小林泰三	生物生産学部ロビー
アド・バード	椎名誠	生物生産学部ロビー
真夜中の神話	真保裕一	生物生産学部ロビー
感染	仙川環	生物生産学部ロビー
ジェノサイド 下	高野和明	生物生産学部ロビー
おれに関する噂	筒井康隆	生物生産学部ロビー
着想の技術	筒井康隆	生物生産学部ロビー
ダンシング・ヴァニティ	筒井康隆	生物生産学部ロビー
りかさん	梨木香歩	学生プラザ1F
ケイゾク/シーズン苅 完全版	西荻弓絵	生物生産学部ロビー
短篇ベストコレクション 現代の小説2004	日本文藝家協会	生物生産学部ロビー
REX 恐竜物語 上	畑正憲	生物生産学部ロビー
REX 恐竜物語 中	畑正憲	生物生産学部ロビー
REX 恐竜物語 下	畑正憲	生物生産学部ロビー
怪笑小説	東野圭吾	生物生産学部ロビー
名探偵の掟	東野圭吾	生物生産学部ロビー
予知夢	東野圭吾	生物生産学部ロビー
ゲームの名は誘拐	東野圭吾	生物生産学部ロビー
東野圭吾公式ガイド	東野圭吾作家生活25周年祭り実行委員会	生物生産学部ロビー
大学新入生に薦める101冊の本 新版	広島大学101冊の本委員会	学生プラザ1F
ユニコーンの日 上 機動戦士ガンダムUC 1	福井晴敏	生物生産学部ロビー
ユニコーンの日 下 機動戦士ガンダムUC 2	福井晴敏	生物生産学部ロビー
赤い彗星 機動戦士ガンダムUC 3	福井晴敏	生物生産学部ロビー
パラオ攻略戦 機動戦士ガンダムUC 4	福井晴敏	生物生産学部ロビー
ラプラスの亡霊 機動戦士ガンダムUC 5	福井晴敏	生物生産学部ロビー
重力の井戸の底で 機動戦士ガンダムUC 6	福井晴敏	生物生産学部ロビー
黒いユニコーン 機動戦士ガンダムUC 7	福井晴敏	生物生産学部ロビー
宇宙と惑星と 機動戦士ガンダムUC 8	福井晴敏	生物生産学部ロビー
虹の彼方に 上 機動戦士ガンダムUC 9	福井晴敏	生物生産学部ロビー
虹の彼方に 下 機動戦士ガンダムUC 10	福井晴敏	生物生産学部ロビー
千里眼 運命の暗示	松岡圭祐	生物生産学部ロビー
千里眼 マジシャンの少女	松岡圭祐	生物生産学部ロビー
千里眼 ファントム・クォーター	松岡圭祐	生物生産学部ロビー
となり町戦争	三崎亜紀	学生プラザ1F
夜は短し歩けよ乙女	森見登美彦	生物生産学部ロビー

以下の QR コードで掲載作リスト(一部)にアクセスできます。

